續談海

安永五年

四十九 五十

内閣文庫
和書 類
三四五四一號
三一冊
一五〇函 一六架

共卅一

内閣文庫
番號 和 34541
冊數 31 (19)
函號 150 94

閣150

續談海巻之四拾九

安永五丙申年

一 正月朔日二日三日 晴天御規式如例年

一 同六日五時御供揃ニ而船場筋ニ而御鷹野被為成

一 同十日上野 御佛参五半時御供揃ニ而被為成

一 去ル二日今暁四番町馬場角内藤友治郎屋敷出火即刻鎮ル

一 同十一日御具足御祝儀并御連歌如例年

御連哥

内閣文庫

御城御會　唐何

一 道作正しや世々の松の春　御

長閑さ恵天の益人　法眼昌桂

和歌亦限りまぬ教傳りて　昌伯

鶯も隣に射る風もかへりけり　昌周

雪や尚竹の村にすみぬらん　甚阿

野沢の水も末乃深きを　行隆

月ならす山下さとき秋の夢　清良

里ハまた火ハ戸のうちに　通故

誰も皆飛ぶ鳥の小田守るすらん　良胤

衣こそうつ寒きよの跡　永向

別ニしも旅の枕の夕時雨　昌文

忘てし伏して空も戸乃あか　昌億

慌ちて花ハ盛の枕まにて　昌泰

苔清く雲ハ霞めぬめ　長補

右御一巡

一 同日御時て御供揃ニて昨之ニ出て成

一 御弓場始有之

一 御前にて役人　御使番八人ニ被　仰付候

一 同廿六日人々公方様ニ御番元

一 同十三日於奥能有之

一 同十七日今辰中刻御供揃ニて紅葉山

御宮江 御社参ニ被遊 巳ノ上刻ニ被為 還御候
大納言様 御同参ニ被遊候
一 正月十八日五ツ時過御供揃ニ而紅葉山御霊屋江
被為 成候
一 同廿四日増上寺 御佛参ニ付当日雨天ニ付御延引
一 同廿七日今日於 山吹之間日光御門主御使ニ付候
布衣以上之面々江被下物御老中出羽守松平
右近将監殿別紙以書付ヲ被申渡候 若年寄
庭侍座
一 諸事倹約之義御用部屋ニ而御目付人江被申渡候
一 同廿八日月並御礼且此日今般被下候布衣以上之面々
於羽目之間 御目見仕年寄 上ニ云候
落書 さし合あり
津軽ニ而炭屋と云ハ如何 赤くして たどんと云ふこゝろ
一杯の物をせん屋いとハ如何 下の物を清ませと云ふこゝろ
白狐を黒助とハ如何 小やまでと云てもしひたるこゝろ
ふたまたあるものを塔とハ如何 吉人の侍を代物とふるこゝろ
流星の字としてムがいとハ如何 水牛と云て飛よりてくるこゝろ
構屋とてたく 材を賣るハ如何 米やとて呉服やとふる迄
同ちてにして 小切とハいひ 旅ちにして 屋市とふるこゝろ
股引屋 たちして 角町とハいひ 採魚ハ何ぞと 新町と云ふ こゝろ

牛なしすしてきふとえいつふにあまりけして宗と云ことし

まへのぬけるとすいとハ此方ニ此んてハあまれとたいこと云ふこと

手をあさけりしてふるとハ此方に力もいらずしてまてると云ふこと

立て来るのに横とハ此方に好尾の内にくあるとハふるミ

甘あるを小僧とハ此方に物を入すしてお袋とゆふことし

木にあしすしてふ原ん何くとハ此方に草にのりけしてぶ仏像と云ふことし

利生もなくてかう狸とハいふに神条もなくておまつりと云ふことし

今とハいふと光なきハ此方に玉門よ麻なきといふことし

瀬戸物にあしすしてあしたちとハ此方に為寄にしてお井戸と云ふことし

婦人とこに越中の名ハ此方に座のこまり越前ちまうことし

娘の口うしくまりるとハいんもし味の口うら洗けると云ふこと

一 二月朔日日光山久能山 御読経 御頂戴其外御礼
如例年

一 同七日
銀百枚 時服十 御使中条大和守 日光 准后
右者於日光御社参ニ付為御祈祷料被遣之

一 同九日
西丸江例御用ニ付此次ニ 西丸江例之 溜之 小笠原若狭守

一 同十五日月並之御禮御精進中ニ付
紀伊中納言 紀伊宰相殿

一 同廿二日
御座之間

一 同廿八日

御太刀一腰 巻物二十
金弐枚 御馬一疋

官位之御礼

紀伊中納言殿

御小性組之内井上玄蕃少輔組

筒井平右衛門

長坂源之丞

大坂御目付代

鈴木源五右衛門

小出藤右衛門

堀 主税

内藤伊之丞

戸田長右衛門

山口藤右衛門

河野鉄次郎

御手洗五郎兵衛

小林七郎右衛門

曽雌権右衛門

谷口源右衛門

日下部権右衛門

安出忠九郎

駒井鍋三郎

保科兵三郎

小出五郎右衛門

石川 大膳

九鬼権之助

遠山久四郎
横山孫十郎
能勢一郎左衛門
本多孫左衛門
山岸十兵衛
大久保太兵衛
内藤左膳
中嶋備之丞
石丸準之丞
浅野大学
稲生平四郎

松浦惣左衛門
曲渕左太夫
植村小兵衛

一 右去年中皆勤之趣達 御聴 上意之趣於菊之間縁頬御老中出羽守松平右京大夫殿被仰渡之、若年寄衆侍座

一 三月四日

宗対馬守
名代 茂喜澤正忠

右者朝鮮之交易不絶候様之手当も勿論不續て不相叶候ニ付出役候不續相勤来候旨并奉候

為御祝儀 上使御越被遊候処御番頭へ被仰付候
上方勝手ニ御渡候処此度交易為元田彼申ニ付其年ニ付
使者并文通御中路金銀子切御渡候 関所通候
證文ヲ以御渡候年々金子方江可申渡候由

一 同十九日
右ニ付妹女松平右衛門督嫡子鶴太郎江御縁組被
仰出候ニ付

御使 松平右京大夫
　　 松平周防守
紀伊中納言殿

一 同廿一日
右ニ付御祝儀ニ通差遣候同殿御息女房姫御方中将殿江

御使 松平右近将監
　　 板倉佐渡守
尾張中納言殿

御縁組ニ付 御祝儀被仰付候

一 同廿三日 今日日光御門跡御馳走所ニ而切支丹改所
酒井石見守殿 若年寄 御留守居 御目付人ニ付可被仰付御役人ニ
被仰付

一 同廿六日
時服二 松平千太郎
名代 柏木權佐
右者信州久能山 御宮并外宝台院御修復ニ付御用相勤候ニ付被下之
銀二十枚
時服二
羽織
奉行 小河原武之丞

銀二十枚
時服三ツ
羽織
添奉行
坂本市郎左衛門
向坂主税

同二十枚
同一ツ
羽織
用役
三浦仲
三田村一郎左衛門

同十枚
同二ツ
羽織
元〆兼帳役
吉岡佐右衛門
鹿子田助太夫

同断
同断
同断
留守居
榎木十郎左衛門
加納佐左衛門

右同断ニ付被下之

一 三月廿六日日光御社参御供行列一ツ橋外御明地ニ
揃夫より九段坂より田安御門前通り一番町御堀
端より半蔵御門ニ入 上覧所ニおゐて竹橋ニ出候

一 公方様 大納言様御出ニ而御供揃之次第 上覧所ニ
被為 成日光御参詣御供行列 上覧有之候

一 種姫君様 御部屋様方御附ニ而御供揃之所御囲ニ而
被為入御行列御覧合被遊候

一 右ニ付老中若年寄共御例之通各登城之上ニ而御祝儀

一 同廿九日
日光御留守中百人組御当番和田倉御門番被 仰付候ニ而
松平和泉守

松平大和守
柳沢式部少輔
同所出火ニ付御用ニ付 仰付諸事 板倉佐渡守
見分之儀も右之衆相勤候
内藤伊賀守
松平淡路守
牧野備前守
戸沢能登守
間部下総守
詰之勤番ニ而八人
寄合五千石 一柳一歓
芝口
元柳原新橋 同五千五百石 久永松五郎
安祥院殿御広敷火之番 同五千石 松平伊之丞
水道橋 同二千石 土屋富之助
赤坂喰違 同五千石 巨勢鉄五郎
芝土橋 同五千石 土井豊松
一 右之通ニ 仰付候
一 四月五日今巳后刻
公方様 大納言様御黒書院ニ 出御 水戸
宰相殿御登 城 御対顔之上又御目見在之
御譜代大名其外幕臣相縁類諸寄仕之番勤之
大名衆中并寄合布衣以上之御役人

御目見有之畢而　入御以後御白書院江出御
出座席右御用番より於其席ニ而諸法令條目讀
畢而表出座右筆組頭玉置半助讀之
但尾張中納言殿紀伊中納言殿尾張中将殿
此者共ニ付御登城無之

一　同十日
御使大目付　水戸宰相殿
右者寛永寺松平主税死去ニ付為御名代被遣之
主税親国ハ飛騨守殿実子

一　同十二日　快晴　卯后刻
将軍家治公日光　御社参　御発駕

一　御留守中　板倉佐渡守殿定御用番酒井
石見守殿加納遠江守殿蒲田御用也

一　御留守中　御老中初御料理被下　諸役人
無用也其外人足類入不申候御城中御書院
御物静江戸中横町ニ木戸メ之夜町方
番所ニ大勢詰夜中ハ拍木ニ而廻り町々ニ而焼之
嚴敷事也

一　同日夜四ツ時二番町　原本空　辰巳より出火

一　別詰ゟ見知　還御後　御預人

一　同廿一日　晴天　午后刻　還御　御社参

一　同廿二日　惣出仕有之

一 同廿二日
公方様より　二種一荷　大納言様江茂　御社参御参詣ニ付　以使　松平右近将監
御祝儀為り　二種二荷　以使　阿部豊後守
一 右同断ニ付　大納言様より　公方様江茂
一 右同断ニ付御台所方江も御進物有之事
一 同廿四日五半時御供揃ニ而紅葉山四ツ時
御長屋ニ　御参詣巳刻　還御
一 同廿五日
御刀備中国青江守次　代金三十枚　御老中　松平右近将監
一 右日光御用相勤候ニ付於　時服十七　若年寄　水野出羽守
御前ニ而
一 日光　准后
一 同　新宮
一 右於日光御社参相済候ニ付　御対顔
紀伊中納言殿
水戸宰相殿
一 右同断ニ付　御対顔
一 右同断ニ付留守詰松平越前守初并日光江被罷越候面々
勤出来候面々　大名御用番ヲ布衣以上之役人
御目見

一 巳中刻御黒書院江
公方様　大納言様　出御、出精大名壱万石以上
之嫡子ニ而部屋住諸物頭布衣以上之役人
御目見
一 右同断ニ付為御祝儀紀伊殿・尾張殿・水戸殿加賀守ゟ使者を以二
種二荷宛被差上之、并御部屋様ゟも被差上之
一 右同断ニ付万石以上ゟ両丸江今日御精勤之
一 同廿六日明廿七日遠　御成御沙汰有之処不正之天気
ニ付相止候
一 五月二日
大納言様御袖留ニ付於御座之間御祝儀
紀伊殿・水戸殿　御対顔畢而溜詰松平越前守
御目見、御祝儀申上候
一 右ニ付諸大名ゟ両方江一種一荷宛被差上之、御部屋様江も
鮮肴一折ツゝ以使者被差上之
公方様ゟ
大納言様江
二種一荷　巻物二十　御使　板倉佐渡守
大納言様ゟ
公方様江
三種一荷　御使　阿部豊後守
一 右御袖留ニ付此御祝ニ而
一 右同断ニ付登　城之面々於席々御老中御逢御祝

御能中ニて
一 右為御祝儀高家諸大名衆奏者番布衣以上之御役人
御吸物御酒被下之
一 五月十日 禁裏御所麻疹御快然御酒湯被為 召候
ニ付為御祝儀御三家方始惣出仕有之於席ニ
御老中御謁之
一 同十三日今度日光 御社参為御祝儀
御三家方初諸大名登 城御能見物御料理
被下之
御能組
翁 三番叟 仁左衛門

如意宝珠風流 孫太郎
それ孫るこさてハ律の清く和く日の光ハ山を
うごかぬ御代なるまつえ四方の海の波風をおさ
まる御代のさかゆるハめてたかりける時とかや
弓八幡 観世大夫 同口右衛門 三郎左衛門 左吉 新九郎 庄兵衛
八幡前 孫太夫 小八
八嶋 孫五郎 喜右衛門 勘五郎 権之郎
同前次 孫太郎
二番 綾鼓 伝右衛門

湯谷　金春大夫　新之丞　市郎兵衛　六蔵　市左衛門

国栖　金剛大夫　宇右衛門　三右衛門　四郎八郎　惣右衛門　又六

祝言　七大夫　藤右衛門　仙助　文次郎　権八郎　長兵衛

中入之

一五月十八日日光准后同新宮増上寺ニ而御
城ニ而能之節御料理被下之

御能組

翁三番叟　源右衛門

老松　金春大夫　新之丞　三右衛門　六蔵　惣右衛門　市左衛門

ゑびす毘沙門　仁右衛門　久右衛門　清五郎　動兵衛

経政　鉄之丞　藤右衛門

うつほ猿　源大夫

半蔀　観世大夫　六右衛門　三郎右衛門　新九郎　庄兵衛

谷行　七大夫　久右衛門　九郎次郎　孫之丞　兵次郎　孫兵衛

祝言　金札　庄兵衛　平右衛門　七五郎　孫太郎　新次郎　鉄之丞

一同十九日

一 大納言様御麻疹ニ被遊候ニ付西丸御本丸ニ惣出仕之
於席ニ老中謁之
一 此度日光 御社参ニ付為御祈祷被仰付今日於能舞台
御当番居諸寺社諸物頭布衣以上之御役人并御目見
以上之役人寄合諸御番儒者医師出之 城西丸之
但於席ニ御料理被下候

御能組
翁 三番叟 備右衛門 九郎之弟 権八郎
加茂 孫太郎 六右衛門 四郎次郎 長蔵
同 清田 仁右衛門
二人袴 貞吉
経政 観世大夫 平右衛門 西郷之丞 権九郎 又三郎
杜若 七大夫 庄兵衛 三右衛門 清次郎 左吉 又六郎
釣狐 孫太郎
景清 金剛宝生大夫 万作 三郎太夫 六蔵 小八郎
祝言 呉服 八右衛門 大蔵郎 三郎四郎 金蔵 左兵衛 五兵衛

一 大納言様御麻疹ニ付為御祈祷料被遣之
御使 横瀬駿河守
銀百枚 日光准后
一 五月廿六日

御座之間
林東郭・麻布ニ上遊御酒湯ニ而
石川淡路殿御使

一 右能　合摺衣　時服二
　　羽織　御服紗
　　御座之間　御目見
　　三家　大澤　相構之

一 五月廿四日　此度日光　御社参ニ付而御祭礼
御能被　仰付之家ニ而申合候様ニ被　仰付
諸役人共　御目見ニ被　仰付候ニ付
醫師一同十九日ニ罷出候　拝領座敷ニ而料理
被下之

　御能組

一 翁三番叟　　　　　　　　弥太夫

一 和布刈　金剛寛文　　喜太郎
　　　　　　　　　　　　清五郎
　　　　　　　　　　　　又六郎
　　　　　　　　　　　　三郎兵衛
　　　　　　　　　　　　忠兵衛

一 猩々　　　　　　　　　仁兵衛

一 兼平　金春寛文　　　万作
　　　　　　　　　　　　忠兵衛
　　　　　　　　　　　　権之助
　　　　　　　　　　　　鉄之助

一 通盛　　　　　　　　　伊兵衛

一 杜若　観世大夫　　　八兵衛
　　　　　　　　　　　　市郎兵衛
　　　　　　　　　　　　新九郎
　　　　　　　　　　　　庄兵衛

一 烏帽子折　半六郎　大次郎
　　　　　　　　　　　　喜三郎
　　　　　　　　　　　　四郎次郎
　　　　　　　　　　　　長次郎
　　　　　　　　　　　　又六郎

一 祝言　又兵衛
　　岩船　　　　　　　　平兵衛
　　　　　　　　　　　　権兵衛
　　　　　　　　　　　　伝助
　　　　　　　　　　　　伊兵衛
　　　　　　　　　　　　平兵衛

一 同廿五日

檜重一組 生干鱈一箱 御使津田日向守 水戸宰相殿

右者麻疹為御祝被差上之候

一 五月廿七日

御檜重一組 生干鱈一箱 御使巨勢伊豆守 徳川宮内卿殿

右同断ニ付被差上之

一 六月朔日

金拾五枚 時服二 羽織 三千石 戸田土佐守

右者右大将様御撫育於後府麻疹御快然ニ付代リ被

仰付候ニ付　右者右京大夫御使大将様御撫育於後京

訳麻疹御快然ニ付為代被召出候所今度子ニ付被成候て

仕候処此度被仰付候　右候御撫育被為在候訳ニ付其ノ二被下置

之御取扱御手当物事ニ付丸京被為置之二付

代々中奥御使番相勤候

一 同二日

大納言様御酒湯被為　召候ニ付今日惣出仕有之

於席々老中謁之

公方様
大納言様へ 綿百把 二種一荷 御使 松平周防守

大納言様へ
公方様へ 右同断 御使 阿部豊後守

右為御祝儀被差上之

一 同五日

右御麻疹御酒湯被為済候ニ付被遣之

御使水戸出羽守 水戸宰相殿

御使松平伊賀守 徳川[illegible]殿

一 同九日

紀伊殿使者 水野土佐守

右者[illegible]

[illegible]

令二万両御借銀被仰付候

一 此節備令御返済之儀ハ御勘定奉行ニ而[illegible]

右之趣申上候旨老中列座周防守殿

一 右御渡候

一 六月十五日山王ニ 御名代御側 稲葉[illegible]守

黄金三枚被納之

一 今日山王祭礼 上覧之節町より白猿出候処

上覧[illegible]

出候[illegible]毛白く[illegible]

一 神輿押 御徒士 又[illegible] 桑山[illegible]

一 今日

一 大納言様御麻疹御快[illegible] [illegible]

[illegible]為 [illegible]

一 同十七日

今検校々

御目付 山川下総守

御使番 小長谷喜太郎

右駿州久能山二而二百年ニ付并宝台院御暇渡

御用相勤候ニ付被下之

此外略之

一 六月十八日寄合 磯野丹波守 卒

当時歌人冷泉為村門人なり

一 同廿一日 雑司谷法明寺ニ而千部読誦

大納言様御麻疹之御祈祷之処

祖師堂為興行 七月二日大僧正ニ有之

一 同十九日水戸宰相殿麻疹御酒湯被成候 城折

御座之間 御対顔

一 同廿五日尾張中納言殿麻疹中ニ付上使被遣之

為御礼被出 城詰 御座之間 御対顔

一 同廿九日

時服二 儒者 林百助

右者日光御社参ニ付詩文差上ニ付

於奥被下之

時服二ツ宛 儒者 人見七之助

評定所勤役儒者 深尾権左衛門

林守濤

深尾権太夫

右日限ニ付於御右筆部屋御頼一紙ニ而

一 七月四日夜濱御殿地之内出火ニ付別紙諸侯

一 同六日

御使由良播磨守
日光新宮

右者御不例ニ付為御見舞被遣之

一 同七日

御使津田日向守
日光新宮

右者御不例ニ付為御見舞被遣之

一 七月九日

御使大沢下総守
日光新宮江

右者御不例御見舞切ニ付被遣之

一 同十四日

干鯛一箱

津田日向守
尾張中将殿

右者御不例ニ付為御尋被遣之

申渡之覚

御目付
松浦与次郎

去ル四日夜濱御殿地之内出火之節早速可罷出処
翌日御注進ニ付御役当番之節不罷出候付不
届ニ付御役御免被仰付候子細被聞召達ニ付相
心得候様可被申渡旨御目付江相達
候付候

御目付
本目隼人

去ル四日夜濱御殿地之内おゐて鉄炮打候者有之候
其場所濱御殿番ゟ御届ニ而不埒ニ付有之処出火之
及候ニ付御者不調法之至ニ候　御目通差扣
可被　仰付候

御目付
井上数馬

去ル四日夜濱御殿地之内おゐて右之者見廻り方人遠
不行届ニ付不調法ニ付先手後御殿地之取締
御方手遠ニ付不調法之処無之候不調法之至ニ候
御目通差扣候様　可被仰付之

右於石見守殿御宅御同人被仰渡之候

一　同十日

御使田沼主殿頭
右之趣御当番中大切ニ付被仰付候　尾張中将殿

御使松田隠岐守
日光准后

右之日光新宮麻疹ニ付被差遣之候

一　日光新宮麻疹薨去ニ付今日より明日迄御停止物
停止普請ハ不苦事

一　右之内不及ニテ御仕置無之

差扣

若年寄殿御申聞
細川宗仙
申二十三

差扣

小普請組牧野備前守支配
神谷平八郎
申二十六

遠嶋

右神谷平八郎方ニ居候
神谷喜玄清

押込

右細川宗仙母
清智院 申二十七

押込ニ申付処数日入牢ニ付
右ニ家処ハ処置ニ不及御沙汰

右宗仙貸子
堀田左仲事
堀田宗謙 申二十七

構無之

右宗仙家来
田村喜玄清 申七十二

伊東半左衛門御代官所和小宗川居
寄合医師細川宗仙抱屋敷
地守清左衛門方ニ居候小普請組
市橋大輔支配ニ而出奔致候
一乗加久玄養子
松葉英俊 申二十六

重追放

芝二本榎高野屋敷
内新堂ニ居候
讃心 申五十

押込

伊東半左衛門御代官所武州
荏原郡大森村
百姓
醫師
左近 申五十二

五十日押込ニ申付候処
旧悪有之候得共不及御沙汰候

存命ニ候ハヽ江戸払

浪人
細川宗仙方居候
尾白平治 申二十八

存命ニ候ハヽ引廻死罪

伊東半左衛門御代官所和小宗川居
寄合医師細川宗仙抱屋敷
地守
清兵衛 申四十六

右於評定所小野日向守牧野大隅守大目付年人
立会日向守大隅守申渡し

一 七月十日尾張中納言殿逝去ニ付同十二日惣出仕ニ而
鳴物者此十日より同廿四日迄停止ニ而普請者
明十日斗

右尾張中納言殿逝去ニ付為御悔被遣之
治興四十九歳

御使 松平周防守
尾張中納言殿

御使 太田備後守
水戸宰相殿

右同断ニ付被遣之

上使 織田一学
松平弾正少弼

同 小出多宮
松平摂津守

一 七月十二日

右同断ニ付被遣之

御使 板倉佐渡守
阿部豊後守
尾張中納言殿

銀五十枚
大納言様ゟ
同三十枚

一 同十二日

右尾張中納言殿逝去ニ付為御悔香奠被遣之

銀三百枚

御使 松平右近将監
日光准后

右新大典侍逝去ニ付為御悔香奠被遣之

小普請組戸川山城守支配
元雄世忰
田村元長

一 同十六日

右一生之内二千人扶持被下人参製法之義ニ付又附
ニて御勤方被躍踊ニ而御役被仰渡ニて

御樽壱組
御使松平周防守
尾張中納言殿
右者御縁中為御見舞被遣之
一 同十九日
右者豊千代殿江松平薩摩守息女御縁組被
仰出候ニ付被遣之
御使田沼主殿頭
徳川民部卿殿
一
松平薩摩守
右者徳川民部卿殿江息女縁組被 仰出候ニ付
御渡之上于向於御庭之間 御目見
一 徳川豊千代殿御縁組ニ付 被 仰出候ニ付右御祝諸庶御奏
者番布衣以上御役人詰合之面々御祝儀申上之於
席々老中謁之
一 七月廿二日
砂糖漬一壺
御使水野出羽守
尾張中納言殿
右者御縁中為御見舞被遣之
一 同廿七日
二種一荷
娘縁組ニ付 被 仰出候ニ付
松平薩摩守使者
比志嶋要人
茂姫名称被 仰付
同人使者
同人
生鯛一折
縁組ニ付 被 仰出候ニ付
茂姫使者
市田喜内
一 種一荷

一　名謀所牙　　同人従者　同　人
生鋼一把
右為御褒美之
一　同廿九日出往金兵衛之是ハ此人達ゟ竹橋御蔵ニ而二千両余
出帳袍紛失いたし候処無宿人共紀し出候儀ニ付今日
存之趣

引廻し之上獄門
元赤坂町権兵衛店
長兵衛事
権四郎
申二十八

遠島
同所坂町家主
吉兵衛
申二十一

追放
本石之衆方ニ居候
加兵衛
申二十五

敲キ之上重追放
赤坂表伝馬町壱丁目
卯兵衛店源兵衛方ニ居候
与吉
申二十二

重追放
神田紺屋町三丁目
又四郎店庄兵衛方ニ居候
勘右衛門
申四十

過料三貫文宛
赤坂表伝馬町壱丁目
卯兵衛店
源兵衛
申二十五

元赤坂町権兵衛店
吉六
申四十三

急度叱り
右吉六妻
里よ
申二十七

過料三貫文
右家主
権兵衛
申五十

同所傳馬町三丁目
忠次郎店
孫兵衛
此者店借之家絵符余ニ付候
家主追放ニ申付処病死いたし候
是ニ右申渡ス

田安御門番
井上甚次郎家来
中間
丹羽五左衛門　申五十九

半蔵御門番
阿部播磨守家来
徒人
竹岸市左衛門　申三十六
同
瀧沢小右衛門　申三十六
徒目付
岩田庄兵衛　申三十七
松本長兵衛　申三十
足軽目付
宇積小右衛門　申四十
南鍋町壱丁目
月行事
惣兵衛　申五十
同町
同
又七　申四十五

右於牧野大隅守役宅松浦兵庫立合
大隅守申渡し

一中秋の地蔵書
三幅對

一

末頼母しき
若衆の三幅對

酒井雅楽頭
井上河内守
阿部備中守

そふく
志やし仕き三幅對

武家娘
三ツ股の新地
瀬川菊之丞

六ヶしき身代
能丸車しき

檀門役
吉原の茶屋
曲渕甲斐守

気に指形の身代
みくるしき三幅對

戸田采女正
秋元摂津守
戸田因幡守

此度古今無類の
大当り取るの三幅對

市川八百蔵
条丈よりお太蔵
池京雲伯

こゝろの廃れど今放
はじめ安〻別を出ぎれぬ
三幅對

板倉佐渡守
中村富十郎
織田出羽守

十分より語見て
下面汁の三幅對

田沼主殿頭
中村仲蔵
石谷備後守

今ときめくの三幅對

きし鶴
九角ゝの人形
稲葉越中守

今の世でも悋嫉ん
身代の三幅対

伊達大和守
蒲生大膳亮
加藤壱岐守

はなてハゆかぬ
三幅対

中川修理大夫
松平下総守
小笠原飛騨守

男にまさる
女房の三幅対

畠山の淵川
清水御殿
松平壱岐守

何とらでも親玉
うめの殺まぬ三幅対

松平右近将監
市川海老蔵
豊竹越前大夫

涙なくてハ
すまぬ三幅対

浄土宗の三部
若衆形の緑組
薬研堀の売

数代のもんわり
よそふへつす
三幅対

榊原式部大輔
吉田伊豆守
丹羽左京大夫

人の知らぬ妙術
誠よ珍しき
三幅対

如小萩原
東よ志海
南にもよ

天下に三幅とない
外幅の玉

今の紀州
肥後の大守

一 同し清水御殿女中正之当ニ御清江遣し
当番 麻布長坂 加藤三郎右衛門嫡女於とよの方

一 八月二日今五半時過し御供揃ニ而大川筋江被為
成候御徒方水泳 上覧之上申ノ中刻前遊
還御候

御徒方水泳姓名
妻木弥之助組
竹田四郎十郎
山本理左衛門
高野久米蔵
鵜野宗五郎
佐久間小猿組
長谷川新六
石原嘉右衛門
武嶋源之助
酒巻源兵衛
野々山源右衛門組
石山條右衛門
青柳小四郎
樋口源之助
京極左門組
利根川鐡次郎
田村熊蔵
中嶋平五郎
井上仁蔵
篠山八蔵

柴田三左衛門組
水谷八五郎
河内市五郎
岸本伊義
木股権十郎

坂本五左衛門組
中嶋源八郎
赤津新五郎
赤荻権太郎
各務藤助

堀帯刀組
鈴木新次郎
藤沼伊之助
高山孫四郎

松波平左衛門組
酒井昌左衛門
山下権太夫
藤田喜左衛門
鵜飼源左衛門
黒田伊左衛門

内藤伊織組
西江喜太郎
篠山金五郎
吉田新三郎
津田藤八郎

奥山内匠組
石井藤十郎
佐々木忠三郎

武田源太郎
松浦源一郎組
桜井仙之丞
志村久米蔵
河野六郎右衛門
後藤三次郎
佐久間源右衛門
神保四郎右衛門組
小山小四郎
岩瀬源三郎
山本金四郎
荻原[illegible]組
坂本九郎次郎
粟生安次郎

加藤平吉
金田利兵衛
後閑幾三郎
新井彌兵衛組
長坂与左衛門
三浦庄右衛門
大沼両八郎
小野次郎右衛門組
安田豊次郎
沢田安次郎
須山次郎四郎
松枝太郎左衛門組
星田四郎三郎
粟田市兵衛

内閣文庫

村井久治郎
寺田宇治郎
萩原永五郎組
栗原小兵衛
小林権次郎
添田又市
万年市左衛門組
辻　喜兵衛
西村梅之丞
小南松次郎
井上半八郎組
川上岩次郎
佐々木七大夫
荻本徳之郎

都合人数七拾五人

一 当秋ハ江戸中ニおゐて福りんとうと云菓子壺ニ入賣ありく事夥敷名まても流行いたし候なり 右様ニ一枚紙ニ摺物にして賣これ賣候なり

紅毛
福輪糖

一 此薬菓子ハ銭も少ク一小児様方ニ人きやう風

一 出切殊外よろしく御座候故さしよせ候て精製
をとけし老いとすこやかにし 一切じつくりけし誠
神妙之御薬なり 御求メ被遊御用ひ被成へし
うつし下候

神田柳原岩井町
ゑびす屋清蝶製

一 八月四日当春上京向之公家衆御延来月下旬之由
今日御祝老人江 御附候
勅使 稲葉能登守
毛利和泉守
院使 代り秋月山城守

一 右当御上京向之公家衆御祝老人江 御附之者
八月十二日
申渡之覚
酉九月日付
小出主庫
昨十二日
大納言様 御本丸江 御成之節 御成之節
清水使之者御座候而如何不調法之至候依之
若和江 御付之
同表御広座不和段
森山忠三郎

昨十二日
大納言様 御本丸江 御成之節蔭時計廊下ニ
清水使之者共罷出候処右之者共揚場ニ而寛翫ニ而メりと
仕候処不心付不調法之至ニ候依之差扣相伺候

同心組頭

半田丹河源

昨十二日
大納言様 御本丸江 御成之節罷出候処
蔭時計廊下ニ清水使之者共不束之儀不心付不調法
之至ニ候依之差扣相伺候
右於松平伊賀守殿御宅酒井飛騨守殿御出席

伊賀守殿江 御渡之 御目付山川下総守相越

一 同廿四日

上野中堂江御修覆
御手伝被 仰付候

松平土佐守

右於波之間老中列座松平右近将監殿江

一 御渡之

一 去ル八月十日
公方様西丸江被為 成御揺被遊候ニ付

御能組

嵐山 今春太夫

翁 宝生大夫

三太郎

四郎次郎

権八郎

市大夫

同 猿楽

孫太郎

慈いす太夫　伝兵衛　吉田七左衛門
矢田清兵衛

六浦　源五郎　喜太郎　市郎兵衛　惣左衛門
清次郎　庄兵衛

さつまの守　傳左衛門　名和川半左衛門
中村半兵衛

乱
観世大夫　彦之丞　三郎兵衛　右吉
彦九郎　又六郎

一　八月廿二日
一屋敷取上之儀御吟味之上同柳生
但馬守殿出羽守殿江名中渡右者兼ゟ
御渡被下
西丸御小性組赤松門与
柳原市郎左衛門
申五十六
同　同人組
上田六左衛門
申二十四
一屋敷之儀御吟味之上同松平勘負殿
出羽守殿江名中渡右者兼ゟ御渡被下
右於評定所豆州志摩守牧野大隅守松浦与次郎

立会志摩守申渡之

一　同廿四日
一通り等之儀御吟味之上同牛﨑温﨑殿
出羽守殿江名中渡右者兼ゟ御渡被下
御小性組大久保能登守組
牧　市十郎
申四十一
右於評定所豆州志摩守牧野大隅守松浦与次郎
立会志摩守申渡し
右三人之御吟味之儀去ル七月十日柳原某酒機嫌ニ而
不慮沈酔之上酒屋共ゟ入込口論いたし蓮〆羽切候
小屋ゟ参りあ之候処候人足神之者先大勢寄合手数
下之方ゟ入込候同右柳原氏之親仁永病之辺居中候子
息之事ニ而右親類共ゟ申来候いたし候処右一件
詮議御吟味有り

一 八月廿五日今日半時ゟ御供揃ニ而御濱　御殿江被為
成申刻ニ被遊　還御候
右於御庭小普請組之面々大的
上覧ニ被遊候　十二人之者時服二ツ宛被下之

神尾若狭守支配
一 嶋田乙三郎
一○ 黒沢角次郎
○○ 前田定之丞
一○ 大久保源三郎

大嶋兵庫支配
○○ 堀江右京三郎
○○ 佐野源之助
一○ 辻文吉

○○ 深見久太夫

石河土佐守支配
○○ 間宮三郎右衛門
○一 河野勘右郎
一一 神保佳一郎
○○ 三宅端之助

仙石源五兵衛支配
○一 仁木音次郎
一○ 榊原五郎左衛門
一○ 富沢小兵衛
○一 足濃部龍之郎

戸川山城守支配
○○ 大村荘右衛門
一一 上坂庄九郎

一 一 荒川長之助

○ ○ 遠野左衛門

牧野備後支配

○ 一 永田源蔵

○ 一 森山松之助

○ ○ 建部伊織

○ ○ 小出庄之助

牧野内匠支配

一 ○ 杉浦吉之助

一 ○ 武田権之助

○ ○ 長谷川三四郎

○ ○ 大岡幸八郎

久留備牧馬支配

○ - 矢嶋熊之助

○ ○ 設楽玄吉

○ 一 朝比奈舎人

○ ○ 諏訪彩十郎

奥田主殿頭支配

○ ○ 駒井半蔵

○ ○ 逸見久三之助

一 ○ 酒井熊三郎

一 一 村上八郎

是枝外記支配

○ 一 松平宇右衛門

○ 一 平岡又太郎

○ ○ 河嶋藤三郎

○ 一 松嶋武助

御津武頭支配
○一 黒川玄蕃
○一 堀助之丞
○○ 湯田吉十郎
○○ 野沢伴次郎

永井監物支配
○一 東條権大夫
○○ 野呂彰之丞
○○ 植村偉三郎
一○ 岡田権藏

一八月廿七日　今日於　御本丸
大納言様江　御膳被進候ニ付　九時　御本丸江被為
成八半過被遊　還御

一九月四日　今巳上刻　御白書院江
公方様　大納言様　出御
勅使　院使着座
廣橋一位
油小路大納言
右御對顔
年頭之御祝儀
公方様江
禁裏より　御太刀目録　黄金三枚
仙洞より　黄金十枚
新女院分　同断

女御より　同断

禁裏御麻疹御酒湯之御祝儀

公方様江

禁裏より　綾十反　三種二荷

仙洞より　緞子二反　一種一荷

女院より　紗綾五巻　一種

新女院より　同断

女御より　同断

大納言様江

禁裏より　御縮十反　二種一荷

仙洞より　繻珍三巻　一種

女院より　紗綾二巻　一種

新女院より　同断

女御より　同断

日光御社参之御祝儀

公方様江

禁裏より　御太刀目録　黄金弐枚　三種二荷

仙洞より　御太刀目録　黄金壱枚

新女院より　同断

女御より　同断

年頭之御祝儀

御太刀目録

進上関白殿使者

今大路出羽守

同　　九條左大臣殿使者　矢野近江守

同　　鷹司右大臣殿使者　小林治部少輔

同　　一条内大臣殿使者　入江式部少輔

同　　二条大納言殿使者　津幡肥後守

薫物　　聖護院門跡使者　松本刑部卿

同　　知恩院門跡使者　櫻田筑後守

御太刀目録　　曼殊院殿使者　西坊法橋

十帖一巻　　勾當因幡

右御目見之節奏者披露　帝鑑之間　御白書院　御目見畢而

一　同五日公家衆饗応ニ付御能有之

御番組

翁三番叟　　仁右衛門

大社　観世太夫

芦分　　伝右衛門

忠度　弥三郎

花子　　弥太郎

江口　金剛太夫

道成寺　今春太夫

同　　弥太夫

祝言七大夫 弓八幡

一同七日右大将家ゟ登　城御返答并御暇被下物

かくし

銀二百枚綿百把ツヽ　勅使　広橋一位

大納言格分
銀百枚ツヽ　油小路大納言

銀百枚綿百把ツヽ　院使葛　同人

大納言格分
銀五十枚ツヽ

諸大夫ツヽ

續談海巻之五拾

一安永五丙申年九月十二日

申渡之覚
小普請奉行　松平大隅守

上野　厳有院様　御廟御唐門之外尾塀
去ル八日之胡倒候ニ付方持場ニ候処不念之至ニ候依之
御目通差扣被　仰付候

右酒井石見守厳敷被仰付候宅ニ而同人へ被申渡候目付本目
年人お織候

一去ル九日夜之大風ニ而房州并相州大磯之辺浪ニより
家屋流レ人馬もおゝく損し候由

一同十五日御仕置

小普請組松平因幡守支配
伊丹小市郎惣領
伊丹吉之助 申二十八

父小市郎御吟味中病死ニ付、且又和中御目付江
相勤申立達候ニ付右伺候之上不埒候不届ニ付事ニ付
小市郎御吟味中病死ニ付跡目之儀不及沙汰
絶家別段之田畑家屋敷七拾俵宛下置候小普請入
申渡

右同人妾
伊丹平十郎 申二十三

又小市郎江申渡和中御目付江相勤申立候節
申渡之趣不埒不届付義ニ付申渡

右於評定所松平対馬守曲淵甲斐守大久保土佐守
立合対馬守申渡之

九月十二日

一 御小性組大久保能登守組土屋市之丞知行所歎訴一件
右土屋市之丞知行所百姓左平次同村百姓又右衛門
を切殺欠落致候ニ付目付等申付候間訴出候申年
六月十二日水野若狭守殿江市之丞当時無之ニ付
山城守殿御渡之御絶組右又右衛門悴右兵衛義
歎左平次召寄之吟味有之候果し度旨申立候ニ付
三年前御用番江市之丞方より申立候ニ付候
同年九月廿二日酒井石見守殿江御用之義及伺候処

訴訟役所へ追て以使者を以金子差出候趣尚又
清左衛門ゟ申候処去ル十八日南部淨正ゟ隣郷役人
之内岩城へ罷還て右之者共御裁許有之申
両人召歎右平十郎を見当り申付相渡申候由
淨正殿より右之段申出候ニ付市之丞申出候
依之右両人召帰村役人被仰付市之丞ゟ申渡候
即之段伺書去晦日以月番酒井石見守殿江
差越以書付申上候処右御同人以附紙被成御
下知
於
御城與河原を以拙者江被渡被成候ニ付則
以附紙之趣市之丞江申渡候右之為御知急度書
以附紙奉写し別紙差上申候

大久保能登守

御小性組大久保能登守組

古屋市之丞

右市之丞義本国山城国綴喜郡下野宗
芳賀之郡文官村百姓太平十郎同村又右衛門方ニ手越
又右衛門を切ころし欠落致候ニ付太平十郎自切
致申付候段明和元申年六月十二日水野壱岐守殿ニ
山城国者共付を以御使者ニ入金御掛引文太兵衛并右衛門義
勘左平十郎ゟ入金銀并手鼻し申度旨相願候ニ付
三方年行月番ニ市之丞方ゟ屋させ候旨同年九月

廿二日御用番江差出候処入金御手限ニ而松浦出雲守宅
丹後守大久保淡路守井上志摩守追而御沙汰ハ入金御
安永二年午四月十六日松平市正御沙汰ハ入金御渡
申渡候ニ付市正役所松坂組頭江　役付候
杉文御沙汰入金二千両相渡候処去ル十八日本多弾正少弼
領分奥州菊多郡中田村之内ニ而伐出ニ付中出
掛役人之者共東海道方弾正少弼役人丹後守江申来候
欺右千両之入用ニ付大事之者付西中候段中田村
名主文右衛門村名主ニ而勘定世話ニ相成候処兵
衛門兄右ハ前書ニ付庄屋村方ニ而右千両放
右者鉛山之者共江御預ケ申候ニ付右之者共親類

村役人共ヘ同所之地ニ而出鉱有之候処右千両相渡
金分之内ニ而弾正少弼役人丹後守江申帰村役人共
村役人共ニ而願出申候処右弾正少弼方ニ而右之
申渡候右市正江之案内ニ付奉行中ニ而御沙汰
右弾正丹後守弾正少弼領分ニ而右金御渡市正之
方へ召合相済候様ニ申渡候事相済

下ケ紙

本多弾正少弼ニ召合之上領分中田村文右衛門村役人
相糺候ニ付丹後守請取候旨市正ニ申渡候

一 九月十八日出火之節有合之者御鉄炮三十挺
持出候ニ付御吟味　小川町御用地ニ而御鉄炮多分有之

一 隠シ出生金一件落着

番方同級
小普請入
百日押込

右同断
三十日押込

五十日押込

御鉄炮玉薬奉行
鵜飼十人組
依之木勘三郎

池田吉之丞 二十五
船場久吉 二十三
青山吾蔵 二十二
細谷喜三郎 二十三
中山孫太郎 三十一

御同心屋敷組頭居番
伊賀之丞

坂田助十郎
新見小八郎 二十九

中根丈助 五十二
榊原求勘之郎 五十三
尾瀬松之助 同
武野平蔵 六十一
椎名幸三郎 二十一

揃之く

御目付田沼市左衛門組
組合過番人

中村広右衛門 四十九
福田文右衛門 五十
廣瀬喜七 五十七
久保文七 三十九
原幸助 二十七

五十日押込

二十日押込

中村茂右衛門 六十

前田半 六十七

鈴木茂八 二十四

金田茂 五十七

元右辻番人[illegible]

五十日押込

松下町四丁目

平兵衛店

又市方同居

同人悴

青木文之進 二十六

過料三貫文

三河町三丁目武兵衛店

吉五郎方同居

髪結

新蔵 二十六

急度叱り

同町四丁目太郎兵衛店

長次郎母

さよ 五十

過料三貫文

同人店

惣八 四十一

[illegible]

清水御門番

古屋[illegible]組

足軽

鈴木伝右衛門 六十一

青木権八 二十八

同断

[illegible]組

足軽同断

吉田宗右衛門 二十七

江口角左衛門 二十七

永井喜之助 四十九

一 右於牧野大隅守御役宅松浦与次郎立会大隅守
申渡候　九月十八日
九月廿九日御仕置ニ相成候事　諸入八月廿日ゟ所ニ而入牢之

御役召上　小普請入
逼塞
西丸御小性組赤井越前守組与頭
榊原一郎右衛門　五十六

御番　御免小普請入
差扣
御小性組大久保能登守組
牧市次郎　四十一

右同断
西丸御小性組赤井越前守組
上田六左衛門　二十四

閉門
小普請組牧野内膳組
榊原吉十郎　二十八
右吉十郎病気ニ付不出来ニ付同人叔父文蔵太右衛門寺

小揚ニ申渡
右於評定所小笠原日向守曲渕甲斐守松浦与次郎
立会日向守申渡ス

一 当夏より麻疹大流行ニ付
世の中此よく知られし時節にて上ハ御門法案下ハ送らん

一 当年の大小
安永ちの細家て立申
大ハ正九にハ吾ちよ申つ
三七十一　よしよし
小ハ八筆ハいいん
四六二十二　よちまない

原文十行
従白紙盡
従文無之

一 十月七日鶴場 御成如例年之通

一 右為御祝儀 大納言様本丸へ御出之節
出御暮之字ニ被遊被為 在御奥向ニ而御能有之奥向
七十以上別段之御料理被下候由

西丸之例御用相勤

奥医師 佐野右兵衛尉
　　　 森雲禎法眼

一 右同断ニ付浅之御方々二種一荷宛被下之 三松平
加賀守よりも右同断

一 十二月四日 溜詰 御譜代大名 高家 諸侯
御奏者番 布衣以上御役人
右今度日光 御社参相済且 大納言様御麻疹

一 択捉ニ而 海御備見ニ而 思召候ニ付御異変し
唐太并蝦夷地ニ而清國并野唐太嶋々ニ而御役人ニ
於下候御能見物御料理被下

原本此所明キ有之

一 同六日御殿ニ而御能見物ニ付 御目見御両人ニ為罷出登
城於席々御酒被下謂し

一 同七日夜八半時芝切通し寺中同所ゟ出火西北風
烈しく海辺迄焼候

一 初冬の比京都ある所へ山伏壱人参り宿借り申候ニ付
断申候得共達而申候ニ付無據貸候処其夜中山伏申候ハ
申候ハ拙者ハ元大食ニ御座候間壱人ニ壱升あてにいた
し候様申候ニ付申候得共飯炊させ候へハ明朝迄ニ追々炊
申候様申候故貳升支度いたし炊させ押付時分
出来候へハ山伏出候而放候より人を付候処いつ方へ参候哉家
主参候而右之次第をはなし候処右之山伏を返り我が方と
付候而右之申候而右様ニ付候而ハ壱人ニ而相済候様宿主参り
申候而此方ニ而出し候へハ六升八生米炊候而八
死する者流行候而出し候右ハ此方不申候而後ゟ
出し候へと申候

一 十二月九日

尾張中納言殿使者 横井丹後守

公方様ゟ
御刀青江延次 代金三十枚

大納言様ゟ
御刀雲次 代金二十五枚

右者中将殿為御遺物被遣之

一 辞世の詠首

右近 年寄元

いとへし身とは思はす辞世なましの命の惜しまるゝ

右京

かれむとやかれし淋しさは人にしらせて秋は来にけり

周防

横手を霜に秋にかゝりたる宿そておもひけれ

佐渡

思ひたちつて散る花は霜のなかにほふ小雪ふりつゝ

主殿

川辺は稲葉に横田の声わたる足のあとなる秋風そ吹

大炊 所司代 土井利重

行はきの山名の尾の茂へせしよを一人まねん

出雲 大坂御城代 久世広明

出宅中そとり誰そるあくまてはいかにかへしき物をかはしらす

相模 堀田正順

うらみてはいはは奏者とはなる物をこえて年々人をこそおもひけれ

御書院番組
実父板倉勝次郎
小泉安房氏興

大御番になりぬ小川の名主ハ味噌はき郡子の志有しけり

町奉行
牧野大隅

我身ハ御城の辰巳志かも角ニて不出事出すと人ハいふなり

同
曲渕甲斐

うかれ女を南北郡とわたしたけしかれとハいはれぬ物を

御勘定奉行
石谷備後守
田安番頭

今の為に借りしき金さへもくともとわかと思ひぬるかな

同
安藤弾正

心にもあらて此世にながらへハ恋しかるへき田安附のな

同
太田播磨

掛川て凪のうけたる仕合ハよくし上野の些しなりけり

御勘定吟味役
桑原能登

長崎のうき世の外思ひてハやかて一度の参事ともかな

禁裏附
水原摂津

いかにしてハなりぬ御役の八字横になりて此字見ぬるかな

日光御修復御免
定火消
堀田帯刀

日光の出来より御修復すむ布衣をも授りて亡ひぬる

一 十二月十九日布衣以上以下御役人子共二十年以上未勤
子共并芸術御吟味して子共未勤御番入十人
御勘定御奉行衆ヘ被仰付 百五十

一 十二月廿五日陰夜分小風強暮前反町ゟ出火
北風ニ而牛込中里町へ飛酒井氏の中屋敷向組
屋敷并持候家ニ而大番組ニ組屋敷飛火ニ而諸
方ゝさわきにて毎ゝ大さわきに牛込辺迄延焼
なり

一 同廿八日

旧御姉女加姫ニ而方
二条大納言殿ニ而御縁組ニ付
二種一荷
紀伊殿御附
水戸殿候ニ
山本宇右衛門

旧御屋敷候ニ
一樽

旧姉女国姫ニ而方
今出川大納言殿ニ而御縁組ニ付
二種一荷
御出御付
旧門人候ニ
尾崎権太夫

旧御屋敷候ニ
一樽

右之通持参於御鄭ゝ御調ニ殿ニ
旧御屋敷候ニ使者於同席旧番ニ居調松平若狭守

一 十二月廿九日
支配勘定ニ
駿府町奉行与力
力石萩之進

右之通御付御右於御鄭ゝ同ニ殿ゝ殿ニ御渡し

一 当二月十六日大名衆下馬ゟ下乗迄召連人数并
江戸中御供ニ而人数ニ旧書付出候付所ニ記之
下馬ゟ下乗橋迄召連人数之覚

一 四品以上并国持之嫡子侍六人草履取壱人

挟箱持弐人六人四人両夫ニ而候傘持壱人
一壱万石以上之侍或ハ弐人或四人ハ趣ニ不限其内ニ有之ハ
列候草履取壱人挟箱持壱人六人四人両夫ニ而候
壱傘持壱人
　右者其内ニ而列候人数ニ候
一四品及拾万石以上並国持之嫡子侍之人
一壱万石以上之嫡子者侍弐人初而より両ニハ不及召添
壱人ニ而揃不召候
右草履取壱人挟箱持壱人但挟箱持中ニ而不及
ニ而も召候両夫ニ而候ハ傘持壱人
一諸当役諸物頭布衣以上之役人並中奥小性衆
三千石以上之者ハ侍弐人草履取壱人挟箱持壱人
両夫ニ而候ハ笠持壱人
一三千石以下之者并布衣以下之役人中奥御番衆
其外御番衆侍壱人草履取壱人挟箱持壱人両夫
ニ而候ハ笠持壱人
一医師侍壱人草履取壱人挟箱持壱人并薬箱持
壱人両夫ニ而候ハ笠持壱人
一御城坊主衆ニ而ハ挟箱中ニ而も不召連候
但御役人共ハ可為只今通之事
一江戸中往還之節供廻り小勢ニ可召列候従者持
たりニ而も可為騎乗一騎之弐騎供連可弐三騎と

一 高ニ応し懸御又者出被可被列事
一 九千石ゟ五千石迄　侍七人ゟ八人
一 四千石ゟ三千石迄　侍六人ゟ七人
一 弐千石ゟ千石迄　同四人ゟ五人
一 九百石ゟ三百石迄　同弐人ゟ三人
一 弐百石　同壱人ゟ弐人
一 五千石以上者押足軽弐人
一 三千石ゟ四千石迄押足軽壱人
一 三千石以下者押足軽無用
　但番頭并支配之面々者押壱人
一 足軽長柄傘無用ニ可致事

一 借馬ニ而乗召連候供之者右人数ニ准し御小勢
　可申付事
一 右之趣急度可被相守懸御役供之者風俗自然
　不作少猥法度可申付尤左之通可被相守候様
　可被申付候
一 御城内外召連候供之者ニ下々猥出候共
　道筋猥ニ被召連前々之処猥之様召候而御心得可被成候
　申候
右之趣宝暦八寅年相達候御書付之通可被成候
以上
　三月

諸大名往還之節従侍多人数召連候面々ニ而も其
往来之妨ニ茂相成候以来左之通可相心得候

一 壱万石以上　騎馬共　十二三人限り

一 五万石以上　同断　十七八人限り

一 拾万石以上　同断　二十人限り

右之内ニ而も身分之限リ有之召列候國持大名
供廻り騎馬共二十騎余人ニ不及候尤先年ニ
相定候通諸家之者共之儀論外之事ニ候
列候者大概其分ニ限り可為

一 且城之内廻ニ無論候曲輪内往来之候者向後
諸家之供人無用候國持諸侯之家ニ者應流茂之分

諸馬供召連候馬上之輩供廻り為持候ハヽ其外曲輪
外ニ同勢を離諸馬供召連候儀ハ可為倍増候ハヽ右之
年ニ於テ通諸馬一騎ツヽ相對之上ニ而可
供之者輩候儀ニ而無用候供廻之儀も大将之
ニ而も為持候供廻り之定ハ相除候者

一 國持諸侯之家ニ者應流茂有之候ハヽ供馬供廻り
候ハヽ是迄挾箱免来候供之者輩供廻り為持候ハヽ以来
以后無用候供之者輩供廻りニ而候面々も前後ニ無用候
又ハ縦付大勢同席不相成候以後ニ而向後ニ而無用候

一 供之者無之面々ニ而同勢ニ而往来供之者輩候ハヽ
相心得候向後堅く可為無用候

一 右之外供廻り同勢も右之通り小勢召連候筈
之障不相成様ニ可申付候

一 小屋 城内曲輪内ニ而相勤候面々迄合戦混雑之節
候時ニ付 同勢合羽籠等之分 穿鑿之途中ニ
相させ置可申候

右之趣急度可相守候者也

二月

一 御城内外召連候供廻りニ之儀前々より相触候処
かまひ之無之様 於御城中ゟ付候儀且曲輪之内ハ手代りニ
差召連候儀無用可仕候 於外曲輪儀者手代りニ差

詰ニ召連可申旨元文五年触有之候処今以
猥ニ於御城内曲輪之内手代りニ差召連候面々多
有之趣相聞候此上召連候触之趣向後急度
ニ可申付候

右之趣宝暦五亥年も相達候処又々去比猥相成候
手代りニ召連候者も有之候而も相見へ候ニ付此上相達る
相達候通急度御曲輪之内ハ手代りニ差不召連於
外曲輪も手代りニ差不詰ニ召連可申候
右之趣可被相触候

二月

諸大名長柄傘之内爪折ニ仕来候長柄傘為持候
面々茂有之候処、爪折之儀ハ国持譜代之家筋之庶流
嫡家筋之分為持来候得共、其外為持候も有之候
為持来候先規以下之ハ向後無用候、尤爪折ニ仕来
長柄傘ハ様ニ而も一通り無用候、且又家来持袋も前々
より不仕付者用候面々ハ格別、仕来者用候ハゝ向後
無用ニ候、前々ニ而も是迄相用候儀ニ候
右之趣存候輩、爪折傘相用候ハゝ大目付へ
可申出候

三月

右之趣可相触旨大目付より申渡候ニ付、右之趣相達候

松平肥後守
有馬中務大輔
佐竹右京大夫
有馬上総介

右打揚腰網代乗物御用候得共、向後無用候
御在国之節一方ニ而者御用候

伊達遠江守

右年始五節句其外御礼登城之節平日出仕之節者右
打揚腰網代乗物御用候得共、向後無用候、平日
用来候乗物ニ而者相用候

立花左近将監

右字下ニくくハ腰網代乗物之五字を抹す

右何も侍従以上之面々ハ打揚乗物御用候侍従以上と
たり共ニ無用候

一鞍覆紋付虎皮交候而御用候処向後無用候

南部大膳大夫

右ハ規式之節ハ虎皮御用候処ニ候得共向後無用候
平日用来之鞍覆ハ其儘御用候

丹羽加賀守

右ハ以前ハ紋付虎皮年始五節句并ニ規式
之節ハ打揚腰網代乗物御用候処ニ候得共向後
無用候

一婚礼之節虎皮鞍覆御用候処ニ候得共向後無用候

平日用来之鞍覆ハ其儘御用候

松平左太郎

右ハ打揚腰網代乗物御用候処ニ候得共向後無用候
平日用来之鞍覆ハ其儘御用候

松平下総守

松平靱負佐

右腰網代乗物御用候処ニ候得共向後無用候同席
並之通惣例之乗物ハ其儘御用候
右之趣ニ而可遂候

打揚腰網代乗物御用候ゆへ

松平薩摩守
松平陸奥守
松平越前守
松平掃部頭
松平弾正大弼
松平左近将監
松平讃岐守
松平大膳大夫
松平相模守
松平大学頭
松平播磨守
松平内蔵頭
松平安藝守
松平出羽守
上杉弾正大弼
松平右京大夫
松平摂津守
松平豊松
松平雅楽頭
松平壱岐守
津軽越中守

綾網代之乗物打揚之物相用候分

松平越後守
松平左兵衛佐
松平千太郎
松平淡路守
松平兵庫頭
松平大炊頭
松平忠太郎
喜連川左兵衛佐
山名靭負

御揚腰網代之内一方御用ニ付
松平肥後守

御揚之内二番之腰網代寄物御用ニ付
有馬中務大輔
佐竹右京大夫
有馬上総介
伊達遠江守

右之通向後御免候間為心得御達候
松平薩摩守
松平陸奥守

虎皮鞍覆相用ニ付

此ゝより御用ニ付

紋付虎皮交候旨御用候

井伊掃部頭
松平肥後守
松平越前守
松平掃部頭
松平弾正大弼
松平左近将監
細川越中守
有馬中務大輔
松平讃岐守
松平大膳大夫
松平相模守
松平播磨守
宗対馬守
佐竹右京大夫
松平図書頭
松平大学頭
松平安芸守
松平出羽守
松平筑前守
上杉弾正大弼
松平肥前守

日本政府図書

松平左京大夫
松平摂津守
松平雅楽頭
有馬上総介
松平越後守

虎皮紋付文候而相用候

松平壱岐守
喜連川左兵衛佐

内閣文庫

右之通向後相極候旨為心得相達之

国立公文書館
National Archives of Japan